

古代文獻に見える「折」の訓み方

赤羽学

『日本書紀』継体紀に見える近江の高島郡の三尾の角折君の「角」は用水路であり、「折」は「サク」と訓むべきではないかということを一稿「枕詞」の「つのさはふ」の背景（昭和五十六年学芸部紀）において指摘し、続く二稿「近江高島郡の『角折君』の素姓とその訓み方」（昭和五十八年学芸部紀）において、記紀及び『日本書紀』を用いて、その可能性の正しさを証明した。今回は、その第三稿として、記紀、『風土記』その他の古代文獻に見える「折」の字を総点検して、矢張そう訓んで間違いないことを一層確実にしなく思う。

まず、『古事記』について、小野田光雄氏編『新編古事記』（昭和五十八年）によって、「折」の字及びその通用字を見てゆく。その場合の諸本の略号は次のとおりである。

1 真（真福寺本、応安四年上中、五年下写、道瑜筆）2 道（道果本、天理図書館蔵、永徳元年写、上巻の前半は伊勢本）

で）3 伊（伊勢本、上、静嘉堂文庫蔵）4 伊一（伊勢一本、本、上、神宮文庫蔵）5 鈴（鈴鹿本、三冊、京都市鈴鹿氏蔵、兼永は天文五年没、現伝する卜部系諸本の祖本）6 春（延春本、中、春日大社蔵、慶長八年延春写、卜部系諸本第九類）7 前（前田本、三冊、尊経閣蔵、慶長十二年大中臣祐範筆、兼永筆本の写）8 曼（曼珠院旧蔵、三冊、香川県多和文庫蔵、兼永筆本を継承）9 猪（猪熊本、三冊、香川県猪熊氏蔵、慶長後半の写か、卜部系諸本第四類）10 寛（寛永廿一年刊本、三冊）11 延（延喜寺蔵、龜頭古事記、貞享四年跋、三冊）12 訓（訂正古訓古事記、享和三年刊、三冊）13 校訂（田中頼房校訂古事記、明治廿年八月刊、三冊）

右十三本の異同を、日本古典文学大系『古事記』の表記及び訓み方を基準にして記述する。

『古事記』に、「折」とその通用字は十九例が認められ、その

うち「ヲル」と訓まれるのは、次の七例である。

天照大神と須佐之男の誓約の際に、天照大神が須佐之男の十笏劍を取って三段に打ち折り、噛んで吹き出すと、宗像の三女神が誕生する。その「打折三段」の「折」は、道のみ「折」で、他は「折」である。但し道は、「打」も木篇のように見え、手篇を木篇に書く癖があつたかもしれない。訓みは、大旨「ウチヨリ」であるが、真・延が無訓、鈴・曼・猪が「オリ」である。

高天の原を迫われ、出雲に下った須佐之男命は、八咫鏡を退治のために、足名椎・手名椎に命じて、八塩折の酒を醸ませる。

二か所見える「折」の表記は、共に①「折」（真・道）②「折」（その他諸本）の二種類となる。『古事記』の古写本の段階では、「折」と「折」の区別をあまり厳密にしていな。江戸期の校訂本は、「ヲル」の場合は「折」、「サク」の場合は「折」と区別するが、それ以前の写本は「折」を全く使わない。訓みは、道・伊・伊・延が「ヤシホリ」、訓・校訂が「ヤシホリ」、その他は無訓である。

崇神天皇の御代に鹽の酒折池が作られた。この「酒折池」は、①「酒柳池」（真）②「酒也折池」（鈴）③「酒也折池」（春・前・曼・猪）④「酒折池」（真・延・訓・校訂）と、諸本間に異同が多く、原形を推定する手掛りがない。因みに『日本書紀』には「反折池」とあり、「サカヲリノイケ」と訓まれている。

垂仁天皇の御代に、皇后沙本毘売の兄沙本毘古王は、皇后に八

塩折の細小刀を授けて、天皇を殺せと命ずる。この「八塩折」は、春・曼が「折」、他は「折」である。訓みは、鈴・前・曼・猪・訓・校訂が「ヤシホリ」、延が「ヤシホリ」、他は無訓である。同じ言葉が、垂仁天皇に沙本毘売が真実を告白する所に使われる。訓みは、鈴・春・前が「ヤシホリ」、曼・猪・寛・訓・校訂が「ヤシホリ」、延が「ヤシホリ」、他は無訓である。

景行天皇の命により、東征に向つた倭建命は、東國から甲斐の酒折宮へ越える。この酒折宮の「折」は、すべて「折」と表記される。訓みは、鈴・春・前・曼・猪・寛が「オリ」、延・訓・校訂が「ヨリ」、他は無訓である。

以上、「ヲル」と訓まれる「折」について検討を加えたが、一部の例外を除き、殆どが「折」と表記されていた。このことは、「折」が古代から近代に至るまで、一貫して「ヲル」と訓まれていたことによるであろう。訓みに「ヲル」と「オル」の混同がみられるのは、中世における仮名遣いの乱れに原因する。

三

次に、「サク」もしくはそれ以外に訓まれる「折」とその通用字について検討を加える。『古事記』が書かれた時点で、「折」は果して「割」と並んで「サク」と訓まれたであろうか。

火神迦具土神を出産したために、伊邪那美命は焼死する。それに怒った伊邪那岐命が、迦具土を斬ると、血が湯津石村に走り就

いて、石折神・根折神が生れる。この「折」は、①「折」（真）

②「折」（道・鈴）③「折」（伊・伊一）④「折」（前）⑤「折」（曼・猪）⑥「折」（寛・延・訓・校訂）の六種類の表記が見られる。このうち、③は誤り、⑥は江戸期以後の校訂であるから除くと、①②④⑤が残る。①「折」②「折」は「折」の、⑤「折」は「折」のそれぞれ異体字かと思われるが、④のみ「折」を用いるのが注目される。訓みは、①が無訓、③が「サカ」「サク」の両訓を持つ外は、すべて「サク」である。

一つの「サク」に対して、『古事記』の写本が、「折」「折」「折」「折」「折」という五種類もの字を使うというのは、どう考えたらいいのであろうか。これは、原字が紛わしかったというよりも、訓むに不審を抱いた筆写者が異体字を作り出したと考えるべきかもしれない。

この『古事記』に照応する記事としては、『日本書紀』卷一神代上第五段（一書六）に、「磐裂神」「根裂神」とある。これは、雷神が磐を裂き、根を裂くことから名付けられた名前である。同様に雷神が大磐を蹴み裂いて溝を穿（う）れたことが、神功皇后撰政前紀（仲哀天皇九年四月）の条に見える。西征を志す神功皇后は、神祇を折る神田を作ろうとして、難（な）の河の水を引く溝を掘るが、迹（あと）驚（おどろ）岡に至って、大磐が塞がって溝を通すことができない。そこで神に折ると、突然落雷があつて磐を裂き、水路を通じた。そこで人々は、この溝を裂田（さきた）の溝と呼んだ。この話は、溝を掘ること

を裂と言つた例となる。

この石折神について、『古事記』に、「上（かみ）の件（くだり）の石折神以下、龍（りゅう）御津羽神（みつう）以前、并（なら）せて八神は、御刀（みかた）に因りて生れる神なり」といった注記が見える。この表記は、①「折」（真・道・伊・伊一・鈴）②「折」（前・曼・猪・寛）③「折」（延・訓・校訂）の三種類となる。例によつて古本系統が本篇であり、新しいものが手篇である。この場合、古本系統が原本に近いとは必ずしもいえない。新しいものがかえつて校訂によつて古い表記を回復しているからである。『日本書紀』興福寺本上巻第廿七の「折ニ焼塔柱」は、同興福寺本中巻第十六の「折ニ分飯ニ而餐」の「折」は「サキ」と訓むべきである。また『名義抄』（院本）『色葉字類抄』（院本）『倭玉篇』（篇目次第）にも「折」に「サク」の訓がある。これらは、平安以前に「折」を「サク」と訓んでいた証拠になる。

しかし、大坪併治氏の御教示によれば、既に、平安時代から中世にかけて、

○磐（い）折（せ）ニ黄金（こ）は是（こ）なり。 ○疏（そ）に云（い）へば磐（い）ニ折（せ）ニ黄金（こ）一（ひと）なり也。（東大寺本百法頭幽抄平安中期前半）

○唯（ただ）折（せ）ニ明（あ）く二空輪（くうりん）散堅（さんけん）すこと有（あ）り異（こと）也。（大東急文庫本大日経義釈延久一承保点）

○折（せ）ヲラタク（観智院本名義抄）
○折（せ）分（ぶん）也（疏本也別也）（天治本新撰字鏡）

○百伝度逢原之折鈴五十鈴宮(神功皇后紀北野本)

など、「サク」には「折」を含めて、さまざまな異体字が使われていたとのことで、『古事記』の写本の例も、これらの一環として考えなければならぬ。

死んだ伊邪那美命の陰には拆雷が居た。この「拆」は、①「折」(真・道・鈴)②「朽」(伊・伊一)③「折」(前・曼・猪)④「折」(寛・延・訓・校訂)の四種類が見られる。例によって古本系統が本篇であり、新しいものが手篇である。訓みは、鈴以下すべて「サク」であるが、宣長は「佐久か佐敷か、訓べき由定かならねば、姑く旧によれり」として「サク」を採用する。これも雷神が物をさくところから名付けられた名前であろう。

黄泉国から逃げ帰った伊邪那岐命は、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原で寝をして、綿津見神を産む。阿曇連等は、その綿津見神の子、宇都志日金拆命の子孫である。この「拆」は、①「折」(真・道)②「折」(伊・伊一・前・曼・猪)③「朽」(鈴)④「折」(寛・延・訓・校訂)の四種類の表記が見える。この場合は、②の「折」に、伊勢本が加わる。宇都志日金拆命は、『延喜式』に見える信濃国更級郡の水鏡・売神社の祭神であり、従って更級郡に近い佐久郡に関係する神であろう。佐久は、千曲川が地を穿って流れる地である。「サク」は、水路を穿つことに関係の深い言葉である。

天照大神は、弟の須佐之男命との誓約の後、須佐之男の乱暴に

耐えかねて、天の石屋戸に隠れる。そのため世界が暗闇と化し、困感した諸神は石屋戸の前で神楽を催す。天宇受売命は、天の香山の日影を手次に繋げ、天の真拆を繋にして、桶を踏んで踊ったので、八百万の神は大咲ひをする。この「拆」は、①「折」(真・伊・伊一・鈴・前・曼・猪・寛)②「折」(道)③「折」(延・訓・校訂)の三種類の表記が見える。これは、「折」が圧倒的に多く、訓みは、鈴以下「ヨリ」とする。しかし、「真折」という言葉はなく、宣長のいうように、『古語拾遺』の「真辟郎」(『日本書紀』継体紀の「磨左楽郎」)、『古今集』採物ノ歌の「みやまには霞降らし外山なる真拆の彩色付にけり」、『伊勢外宮ノ儀式帳』の「真佐支乃鬘」、『奥義抄』の「真前の窓にて頭を結」などの例により、「マサキ」と訓むべきである。但し「折」は、「折」に直さなくとも、「サキ」と訓める。『日本書紀』は「真坂樹」と書いて、「マサカキ」とも「マサキ」とも訓ませている。この字が殆どの本に「折」と書かれているのは「ヨリ」という訓と無関係ではなからう。「折」が「ヨル」と訓まれる場合は、字形に変化がない。これは次の例にも見られる。

須佐之男命の子大國主神は、稲羽の海岸で皮を剥がれ、塩風に身を拆かれてゐる菟を助ける。この「拆」は、①「折」(真・伊・伊一・鈴・前・猪・寛)②「折」(曼)③「折」(延・訓・校訂)の三種類である。古写本は、曼を除き、すべて「折」であり、鈴より寛まで「吹キ折ル」と送り仮名を加えている。しかし、意味から言って、

それは不都合で、後の校訂本の如く、「フキサカエ」もしくは「フキサカレ」と訓むべきであろう。但し、「折」を「折」に変える必要はない。

心の優しい大国主神は、兄達にねたまれ、さまざまな危害を蒙る。兄達は、大国主を山に連れて入り、大樹を切り伏せ、茹矢をその木に打ち立て、その中に入らしめ、それと同時に氷目矢を打ち離つて、打ち殺した。そこで母親が哭きながら、天上の神産巢日之命に請すと、探し出して、其の木を折り、蘇生させた。この「折」を日本古典文学大系の注者は、「底（訂正古訓古事記）に『折』とあるが、諸本に『折』とあるに従つて改めた」というが、ここは、意味の上からも「サク」でなければならぬ。茹矢は、多分楔のようなものであろう。それを木に打ち込んで隙間を作り、そこに大国主を入れて、後に茹矢を抜いて圧殺したのである。だから大国主を取り出すには、木をさかなければならない。この表記は、古写本はすべて「折」であるが、「折」のままで「サク」と訓めるから、それでよいのである。寛は「折」に直し、校訂もその字で「ワケ」と訓むが、その必要はない。

大国主神は、高天の原から下された迦御密神に降参し、平和裡に出雲國を譲り、「打竹の、登遠遠登遠遷」と歌う。この「打」は、諸本すべて変りないが、これについて宜長は次のように言う。

打竹、打ノ字、旧事紀に折と作るに就て思ふに、折を誤れるものにて、【旧事紀は本ト此記などを取て書るものなれば、此記の古本に折とありしを取れるが、後に彼レは折に、此レ

は打に誤れるなり、【佐伎陀氣なるべし、万葉七【四十二丁】に辟竹とあり、破有竹を云なり、

この説は卓見であるが、元「折」とあり『旧事紀』が「折」に、現存「古事記」が「打」に誤つたというのは正しくない。恐らく『旧事紀』の引いた古本『古事記』に既に「折」とあり、それで「サキ」と訓ませるつもりだったに相違ない。尚、諸本の書入れ異同について補足すると、伊・伊一に「打」の傍に「折」が記され、鈴に「朽」の傍に「打」が記される。

天孫降臨に従つて下界に至つた天宇受売命は、すべての魚を集めて、「汝は天つ神の御子に仕へ奉らむや」と尋ねると、諸の魚は皆「仕へ奉らむや」と答えた。しかし海鼠だけが口を開かなかつた。そこで天宇受売命は、「此の口や答へぬ口」と言つて、細小刀をもつてその口を拆いた。故に今に海鼠の口は拆けている。

この二例は、鈴が「朽」として、前の字に「折イ」と傍記する以外、古写本は、すべて「折」である。訓みも鈴以下すべて、「サク」と訓ませている。ここは、「サク」としか訓めない所であつて、それが殆どの写本に「折」と書かれていることは、原本にそうあつたとみなければならぬ。以下近世の校訂本が「折」と直したのは、「折」のままで「サク」と訓めることを忘れてしまつたためである。

中巻の景行天皇の条の小碓命の熊留征伐の話に「折」が使われる。小碓命は、熊留建の背中をつかまえ、尻より剣を刺しとおし

その原形が「折」であったことを思わせる証跡が『旧事記』に存在し、この事実とは、『古事記』の写本が室町期を遡り得ない現状を大きく打破するものといえよう。もし、『古事記』が「サク」を「折」と表記していたとしたら、迦具土斬殺・伊邪那美の屍体を・綿津見神の誕生に見える「折」の異体字は、「折」を「サク」と訓み得なくなつた中古・中世期に、さまざまに当て行なわれた結果といえよう。しかし、写本によっては、前田本は、一貫して「折」が使われ、こうしたことは、写した人の識見によると思われる。それに対し、「ヨル」と訓む「折」は、諸本の間に殆ど異同がない。これは、この訓みが古来変らなかつたことによるであ

次に、『古事記』に用いられた「折」とその通用字の、諸本による異同の一覧表を示しておく。

[illegible]

ない。続いて一番の第三に「次ニ避^{サル}ニ火災一時ニ生^ナル火折彦火出見尊」とある。「避」はまた「サク」とも訓めるので、その意味が名前に読み込まれたとすると、「ホノサキヒコ」という訓みは、正しいとしなければならない。更に一番の第五に、この神が「吾^ミは天神之子^{ミコ}。名火折尊^{ナヒサキミコ}」と名乗りをあげるところがある。この訓みは、吉田家兼方自筆本には「ホノサキ」とある。一番の第六にも「火折尊^{ヒサキミコ}」という訓みが見える。この「折」の字は、鴨家本・書陵部本・阪本本・玉屋本は、「折」となっている。こゝろみでみると、「火折尊」の訓みは、『古事記』によって「ホヨリ」に統一できないことが知られるであろう。

火折尊は、兄の釣針を失つて、それを求めて海宮に至るが、その話の一書の第四に見える「火折尊」は、一貫して「ホノサキ」と訓まれている。またその字は、玉屋本に「折」と書かれている。「ホノサキ」という訓み方に従えば、この神は、火災が避けてや火の鎮まつた時に生れた神の意であろう。宣長は、この神の名義を「此は火の衰へたる時に生まれる故の御名にて、火弱^{ヒヨク}りの義なり、書紀一書に、火夜繼命^{ヒヨリノミコ}ともあるを以て知ルべし」と解くが、「ホヨリ」が「ホヨリ」になるか、尚一考が必要であろう。「折」に「サク」の訓みがあり、『書紀』の古訓もそう訓んでいるから、それを採用するのも一法であろう。

垂仁天皇七年に、剛勇を誇る当摩羅速^{タマラハヤ}に野見宿禰^{ノミヤクニ}が挑戦し、斃殺^{コロス}す話がある。その条に「折」の字が三回使われ、それぞれ訓み

が違ふ。「二人相對テ立。各拳テ足ヲ相蹴。則^スニ折^マ当麻羅速之脇骨^{タマラハヤノワキボネ}。亦^モ踏^{フミ}ニ折^マ其腰^{タマラハヤノウシ}而殺^{コロス}之。故^{ユヘ}尊^{ミコ}ニ当麻羅速之地^{タマラハヤノチ}。悉^{スベテ}ニ賜^{タマフ}ニ野見宿禰^{ノミヤクニ}。是以其邑^{ミコト}ニ有^{アル}ニ腰折田^{ウシマゼノタ}之縁也^{ノヘ}。」この三回の「折」は、それぞれの意味によって訓み分けられたのであろう。「折」に「クジク」の訓のあることは、『倭玉篇』篇目次第に見える。もう一つ「クジク」の訓みは、雄略天皇九年五月に「折^マニ衝四海^{ツクシヨクニ}」とあるが、前田家本に「コトムク」とあり、その方を採用する本もある。

次に問題なのは、継体天皇元年三月の「三尾角折君^{ミノサキマゼノミコ}」の訓みである。これについて、前掲拙稿においては、「ツノサク」と訓みべきことを提唱した。その理由は、第一に、角折君は、垂仁天皇が雷神と考えられる山背大國の不避^{フビ}の女、櫛戸辺^{キハタノヘ}と結婚して生れた磐衡別命^{イハヒラキノミコ}を先祖とする豪族で、安曇川^{アトノカハ}が琵琶湖に注ぐ角状の地近江の高島郡に居住し、角（水路）を開削する仕事に従事したらしいこと、第二に、近江と同一の地名を多く持つ遠江の浜名湖の浜名川の畔に角避彦神社があり、「ツノサク」と呼ばれていること、第三に、「折」の字は「サク」と訓むことができ、『日本書紀』の有力な写本である北野本に、「折^マ折^マ」とあることなどによる。今回、『古事記』の「折」の訓み方を検討してみても、かなり多く場合「サク」と訓まれていることが判明し、「角折」を「ツノサク」と訓むべき根拠が補強されたように思われる。

その他『日本書紀』で「サク」と訓みうる「折」の例をあげる。

欽明天皇二年七月の「新羅所^レ折之國」は、「ハツレル」もしくは、「ハクトコロノ」と訓まれているが、「サケル」「サクトコロノ」と訓むこともできる。舒明天皇十年七月の「大風之折^レ木^ノ発^レ屋」の「折」は「ヨリ」と訓むのが普通であるが、「サキ」とも訓める。同様に天武天皇九年七月の「飛鳥寺西槻枝自折而落^レ之」の「折」も「サケテ」と訓む方がよい。枝はボキリと折れるよりも、裂ける場合の方が多い。皇極天皇四年四月に、高麗の学問僧得志が、虎を友として、不思議な仙術を会得し、虎から得た治療用の針を柱の中に隠して置いたが、後に虎がその柱を折って針を取って逃げ去った。高麗の国では、得志が帰國を願っているのを知って毒殺したという奇談が載せられている。「虎折^ニ其柱^一」の「折」は、「ホリ」「ワリ」「ヨリ」などと訓まれているが、「サキ」が一番妥当ではないかと思われる。指先の使えない虎は、柱の裂目に隠された針を取り出すことができず、柱を裂いたのである。「折」を柱を裂くに用いた例は、『日本書紀』上巻第二十七に「折^ニ燒塔柱^一」とあり、これを「サキヤキ」と訓む。また通用字の「折」を用いた例として、同上巻第一に「柱之折間」とあり、「サケシマ」と訓む。以上、「折」を「サク」と訓むことにより、『日本書紀』の多くの「折」が「サク」と訓めることが判明した。

五

続いて『風土記』の「折」を点検する。例によって日本古典文学大系本を基準とする。

常陸の行方郡に、倭武の天皇の巡幸の時、河を上ってゆくと、梅槐が折れた、よってその河の名を無槐河（むくわい）というところ。

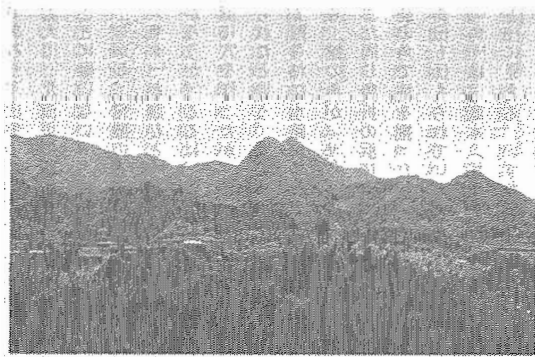
「折」は「サク」と訓めないことはないが、「ヨル」の方が妥当であろう。出雲の意宇郡の「来待川^{（きまつがは）}」更折北流^{（さらせきほくりゅう）}、出雲郡の「出雲大川^{（いづみおほがは）}」北流更折西流^{（ほくりゅうさらせきせいりゅう）}などに見える「折」も、「ヨル」と訓むことに疑いない。

しかし、常陸の香島郡の角折の浜は、継体紀の「角折君」を「ツノサク」と訓むとすれば、これも「ツノサク」と訓むべきではなからうか。ここは、古^{（いにしへ）}大蛇が^{（おほへび）}あつて東の海に通ろうと思つて、浜に穴を作つたが、蛇の角が折れ落ち、よつて角折の浜と名づけられたという。このように角は蛇の頭についており、それによつて掘られた水路が角折と呼ばれたのである。その「ツノサク」から、蛇の角が「サケオチ」という由来伝説が作られたのであろう。また同じ角折の浜について、倭武の天皇に水をさし上げるために、鹿の角で地を掘つたが、その角が折れたので、角折と呼ぶという異伝も伝えられている。その本文「為^ニ其角折^一」所以名之の「角」は、底本（松下見林自筆本）になく、板本によつて補つたと注に見える。いずれにせよ、「折」は「サク」と訓める。「折落」を「サケオツ」と訓むとすれば、天武紀九年七月の「槻枝自折而落之」も「サケテオツ」と訓む方がいいかもしれない。同様に、

播磨の揖保郡の上宮岡・下宮岡・魚戸津・杵田の地名の由来を述べた中に、「あふこを折れてにお荷落ちき」とあるが、この「折」も「サク」と訓むべきではなからうか。というのは、底本（平安以卿書写と鑑定せられる天理図書館所蔵三条西家伝来本）に、この字は「折」とあるからである。この字が「サク」と訓まれることは、既に幾つかの例に見られるところである。諸本が「折」と訂正して「ヨル」と訓む必要はない。末尾の影印を参照されたい。

常陸の久慈郡太田の郷に、天孫と共に筑紫の日向の二所の峯に天降り、三野の国の引津根を経て常陸に至った櫛日女命を祀る、長幡部の社がある。日本古典文学大系本が「二所の峯」と表記するこの山は、底本（松下見林自筆本）及び影考館本には、「二折之峯」とある。また板本（天保十年刊）には「二神之峯」とある。この相違について、橋本雅之氏は、『常陸国風土記』本文批判の「一方法」（神代卷下天孫降臨の一書の「日向饗之高千穂根日二上峯」や、『日本紀』所引の『日向風土記』の「日向之高千穂二上峯」と同じとみて直したであろうが、「上」と「神」の「ミ」は、甲乙の相違があつて、同一視できないと述べ、また「二所」に直して、「所」を「カミ」と訓むのも異例とされ、結局底本の「二折」を尊重すべきとされる。この説は、至極妥当である。橋本氏は、「二折之峯」を、二つの頂上（折れ曲った部分）をもつ山の意とされるが、実際の山をみると、頂上が二つに裂けている。橋本氏は、訓

みは明示しておられぬが、「フタサク」と訓むべきであろう。



宮崎県高千穂町二上之峯
山本善直君提供

その三は、宇波の折絶より、間見の国であり、その四は、三穂の埼である。「折絶」を岩波文庫の『風土記』は、「打絶」と改めるが、その必要はない。この訓み方について、後藤蔵四郎氏の『出雲国風土記考證』（大正十五年）に、次のように見える。

自去豆乃折絶而を、風土記解や訂正風土記には「去豆の打絶よりして」と読んで居れども、これは古写本にある儘に「去

出雲の意宇郡

に見える国引き

説話では、八束

水臣神野命が、

余所の国の余り

を引いてきて、

縫い合わせて出

雲の国を大きく

する。その一つ

は、去豆の折絶

より、八穂の支

豆支の御埼であ

り、その二は、

多久の折絶より、

茨田の国であり、

三穂の

豆より折絶（さく）と」と読むのでよからう。古典には折（さく）といふ字が折（さく）と書いてあることを屢々見る。去豆は川下湾（かわしも）の東北にある小津浦に当る。

このように、「絶」を「たち」と訓むかどうかは別として、「折」を「さき」と訓むのは卓見である。これは、前掲の橋本論文にも引かれているのだが、青木紀元氏の「山の続きがその線の所で裂け絶えたようになっている場所、すなわち一つの山塊の間の細長い狭陰部を意味する語」（『国文学研究』十二号昭和三十三年三月）という解に従うべきであろう。青木氏は、「折絶」の「折」も「絶」もどちらも自動詞として、「サケタエ」をよしとされるが、『古事記』の稲羽の菟の条に「吹折」（フキサク）の例もあり、複合動詞を必ずしも自動・他動のどちらかに揃える必要はなく、私は「サキタエ」を採りたく思う。

播磨の揖保郡に観折山（いひぼ）がある。その山は、応神天皇がそこで狩をなさり、走る猪（いの）を射た観弓が折れたので、観折山と呼ぶという。これは、橋本氏も言われるように、「折れた弓と、高く聳える山とはその形態が極めてよく似て」いるので、「ヨレ」がいいかと思われるが、ただこれも一つ「サク」と訓み得る可能性が考えられるのは、現在の地を「ケヤキ（概）坂」と呼んでいるという日本古典文学大系の指摘である。楠原祐介氏らの『地名用語語源辞典』（昭和五十八年）には、坂は「サ（割）・カ（処）」で「分割所」の意から『境』の意を生じ『山の境』の意から「坂」の義に転じ

た」とする松岡静雄の説が引かれている。坂は、果してそのように転じてきたかは別として、「サク」と語根を等しくすることは、十分考えられる。概と樺（けや）は同木であるから、「ツキシサク」が「ケヤキサカ」に変わった可能性も考えられる。しかし、「折」は多くの場合「ヨル」と訓むのであり、無理な推測は禁物である。

「折」が「サク」と訓まれることについて、江戸時代の学者は気づかなかつたと見え、『古事記』の「サク」と訓むべき「折」は、すべて「折」に直しているが、その必要はない。しかし、「サク」と訓むべき字は、「折」の外に沢山の異体字があり、それらがすべて「折」に集約されるかどうかは確言できない。やはり「折」には、「サク」と訓む場合があり、それは、その字の使用われ方によって判断すべきであるという程度に止めるべきであろう。尚、『播磨風土記』三条西家本の影印を天理善本複製によって左に示す。（頁）「折」と「析」の差は甚だ微妙である。

う折之雲（三〇） 観折山（三三七）

折其（三） 故日槐折山（三三七）

初折荷落所（三九）

観折山（三九）

『風土記』の本文の扱いは、多く橋本氏の御教示を得た。謝意を表する。